# Stage Two
# 「火喰い鳥の羽根」

「蛮勇の士ウーサー、ここに討ち取ったり！　帝国兵よ、いさぎよく降伏するがいい。これ以上刃向かうとあらば我々も容赦はしない！」

ゾングルダーク城でランスロット＝ハミルトンは大音声で呼ばわった。

彼の手に握られているのはシャローム辺境の支配者、ゼテギネア帝国の処刑吏と恐れられた蛮勇の士ウーサーが愛用していたデビルハンマーだった。

真っ黒い柄に、誰も読むことのできない文字のようなものが頭部にびっしりと刻まれたそれは、一説には大昔のオウガバトルでの悪魔の忘れ物だと言われていて、その巨大なこと、常人には持ち上げるのがやっとの代物だ。

ウーサー自慢のデビルハンマーをその部下たちが知らぬわけはなかった。デビルハンマーはウーサーの代名詞でもあったからだ。

それが解放軍の手中にある理由に気づかぬ者はない。

恐れをなした帝国兵は次々に武器を捨てて降伏した。

ランスロットはデビルハンマーを掲げたまま、ゾングルダーク城の張り出しに出た。

続いて出てきた騎士のアレック＝フローレンスとオーサ＝イドリクス、人形使いのエマーソン＝ヨイス、魔法使いのカシム＝ガデムが勝ち鬨の声を挙げると、呼応する声がいくつもあがり、解放軍の勝利を否が応でも広めていった。

「おめでとう、ランスロット。ウーサーはあなたの仇だったのだろう」

そこにウォーレン＝ムーンを従えたグランディーナが現れた。刀こそ鞘に収められていたが、返り血のついたままの胸甲は、彼女もまた戦いのなかにあったことを知らせていた。

ランスロットは彼女を張り出しに招いた。

「仇か。ウーサーと対峙した時に感じたのは、奴がわたしの記憶にあるよりずっと小さかったということだ。恐ろしくなかったわけではない。だがわたしは奴を過大評価していたようだ。ゼテギネア帝国の処刑吏としてゼノビア王国騎士団の者を多数殺したウーサーもしょせんは帝国の命令で動いただけなのだ。本当の敵を見失うなと、そう亡きグラン王に言われたような

気がしたよ」
　解放軍のリーダーが現れると、歓声はもっと大きくなり、グランディーナも今度はそれを抑えようとはしなかった。しかし彼女が自分から愛想を振りまきもしないことは、ウォーレンやランスロットの予想していた通りだ。
「明日はラワンピンジに向かう。各部隊のリーダーだけ上がってきてくれ。以上だ」
　手短にそれだけ言って、グランディーナは張り出しから引っ込んだ。
　やがて、言われた通り、各部隊のリーダーが玉座の間の隣の部屋に集まってきた。
　解放軍は三〜五人からなる小部隊で行動している。それぞれの部隊にはリーダーが一人いて、伝達事項は各リーダーを通して行われることになっていた。各部隊のリーダーは、ランスロット、リスゴー＝ブルック、ガーディナー＝フルプフ、ロギンス＝ハーチ、それにウォーレンとマチルダ＝エクスラインだ。
　ランスロット、リスゴー、ガーディナーの部隊は騎士と戦士を中心にしており、一、二人の魔法使いや人形使い、それに女戦士が加わる。
　ロギンスは魔獣を専門に使うが、いまのところ解放軍にいるのはグリフォンが一頭とヘルハウンドが一頭だけだ。ウォーレンの部隊は補給、マチルダの部隊は治療が主体だった。
　解放軍のリーダーであるグランディーナはどこの部隊にも所属せず、一種の遊撃隊のような存在であった。
「言った通り、明日はラワンピンジに向かい、シャローム地方を落とす。シャロームを落とせば、旧ゼノビア王国の版図で目立つのはゼノビア以外はイグアスの森だけとなる。何か質問はあるか？」
「特にないようだ」
　皆の反応を見て、ランスロットが応える。
「そのシャローム地方だが、帝国に反抗する義勇軍が存在する。それほど派手な活動はしていないそうだが、バハーワルプルで合流したいと言ってきている。異存はないな？」
「そのような存在自体初耳ですが、信用してもよろしいのですか？」
　ウォーレンが慎重な意見を述べると、皆が賛同するように頷きあった。
「彼らは元々ゼノビア王国の魔獣軍団の者だと言っていた。騎士団とは違うが、あなた方にとっては身内も同然ではないのか？」

また皆が顔を見合わせた。だが貧乏くじを引かされたのは、今度もウォーレンだ。

「魔獣軍団は騎士団や魔法団とは違い、ほとんどの団員が無事です。それもこれも軍団長ギルバルド＝オブライエンが、グラン王の暗殺直後にゼテギネア帝国に降伏したためだとはもっぱらの噂、あなたの仰るように同じゼノビア王国の一員とはいえ、これほど事情が違うこともそうありますまい」

「知っている。シャローム地方じゃ有名な話だ。ある者はギルバルドを帝国の犬と誹り、ある者はギルバルドに助けられたと言う。だが私の言っている義勇軍はギルバルドが帝国に降伏後、離反した有翼人たちが主体だそうだ」

「それでは彼らを信用すると仰いますか？」

ウォーレンがもっともな疑問を口にしたが、グランディーナはすぐに頷いた。

「義勇軍の存在は本当にあるし、彼らを疑う理由がない。帝国の罠を疑うには行動が早すぎる。戦力は欲しいところだ。まさかゼテギネア帝国相手にこの戦力のままで勝ち進めると思っていたわけではあるまい。ほかに反対意見はあるのか？」

「慎重なご対応を、としか申し上げようがありませんな」

答えたのはランスロットよりわずかに年上のリスゴーだったが、皆の気持ちは同じようだ。

「勝ち戦で守りに入れば次には負ける。慎重な対応とやらはあなた方に任せる。いいだろう。義勇軍の代表には私一人で会う。

ロギンス、明日はグリフォンを借りるぞ」

「いつでもどうぞ。あいつらも血の臭いを嗅いで気が立ってまさぁ」

鷲の頭に獅子の身体を持つグリフォンは気性の荒い魔獣だ。その翼はゼテギネア大陸に棲息する魔獣のなかで最も速く、伝令や個人の移動に重宝されているが、グリフォン部隊を作るほど多数のグリフォンを手なずけたという話も聞かれたことはない。

「待ってくれ」

ランスロットの挙手に皆の視線が集まった。

「グリフォンはともかく、いまの話では君一人で行くつもりか？」

「そうなるな」

皆の反応を確かめてグランディーナは頷いた。

「シャローム地方はいまだ敵地だ。味方に会いに行くのだとしてもわたしも同行させてもらう。リーダー

一人で行動させるわけにはいかない」
「あなたの部隊はどうする？」
「今日の戦いもある。アレックをリーダーにして、しんがりを任せればいいだろう。帝国の反撃はそれほど心配する必要はあるまい」
「ウォーレン、あなたの意見は？」
老占星術師はひとつ咳払いをした。
「ランスロットの意見は的を得たものだと思います。お一人での行動は慎んでいただきたい。あなたが我々の将であるということをお忘れなきよう願います。それと、念のために義勇軍の代表の名前もお伺いしておきたいのですが」
「代表の名までは聞いていないが、仲介役はカリナ＝ストレイカーと名乗った。知っているか？」
「いえ、ゼノビア王国の魔獣軍団であれば、知った名の一人もいるかと思いましたが知らない名でした」
「では、あなたの知っている有翼人の名は？」
「ギルバルドの親友にカノープス＝ウォルフというバルタンがいました。実力では魔獣軍団一と噂されていましたが副団長位にもなかった人物です。彼がいれば我々の心強い味方になってくれるかもしれません」
「カノープス＝ウォルフか。気にしておく。明日は先に発つ。ラワンピンジで合流しよう。ほかに何かあるか？」
「ないようだな」
ランスロットがまたも皆の気持ちを代弁する。
それでグランディーナは真っ先に立ち上がった。
「初戦突破は吉兆だが一勝ぐらいで浮かれさせるな。いまは休まずに進む時だ。それと各員の行動はリーダーの責任を問う。よく肝に銘じておけ。ロギンス、グリフォンのところまで付き合ってくれ」
「承知しました」
彼女が猛獣使いとその場を離れると、軍議は自然と解散となった。

フェルナミアを発って三日目、解放軍は最初のゼテギネア帝国の拠点、シャローム地方辺境のゾングルダークを落とした。ウーサーに率いられた帝国軍は、幸い、戦闘にまだ慣れていない者の多い解放軍にとってもそれほど手強い相手ではなく、負傷者は出たが、死者は出さずに乗り切ることができた。帝国軍の駐留部隊が、本来ならば数で劣るはずの解放軍より少なかったことも幸いした。ゼテギネア大陸の東端は、戦略的に見れば、大した重要性はなかったのだろう。

原因は何であれ、初戦突破は吉兆だ。だが戦いはまだ始まったばかりであった。

翌影竜の月十四日、ウォーレンに率いられた解放軍はゾングルダークを発って街道を西に進み、ラワンピンジに向かった。ゾングルダークからラワンピンジまでは街道を半日も歩き通せば着く距離だ。

昨日の話し合いどおり、ランスロットに替わってアレックに率いられた部隊が最後尾を勤め、先頭はリスゴーとガーディナーの部隊が進んだが、帝国軍の襲撃もなく、一瞬、自分たちが戦争のまっただ中にいることを忘れそうなのどかさであった。春の陽気も暖かで天気も申し分なかった。

グリフォンの翼は速い。

本隊より先に発ったグランディーナとランスロットは、夜明け後、二時間ほどでバハーワルプルに着いた。

バハーワルプルはシャローム地方でも一、二を争う大きな町で、中州の島にあるため、外壁を持っていなかった。

本土との連絡はヴォルザーク島のように船で行うが、住民に有翼人が多いため、自らの翼で行き来する者も珍しくない。

二人の姿を見て、地上にいた一人のホークマンが手を挙げた。

ホークマンはゼテギネア大陸でいちばん多い有翼人であり、人間の三倍ほどの寿命を持つことで有名だ。その翼はホークマン自身の身長より高く、白と茶のあいだで様々な色と模様があった。またたいていのホークマンもたいていの人間より身長が高かった。

グランディーナはグリフォンを器用に操り、彼の側に着陸させた。

速いグリフォンの最大の欠点は同じ飛行する魔獣であるワイバーンに比べると力で劣ることだ。そのために後列に座ったランスロットは、剣以外を全てウォーレンに預けてきていた。

先にグリフォンを降りると、グランディーナは手綱をランスロットに押しつけた。

彼女は足早にホークマンに近づいていくと、黙って赤く染められた羽根を差し出した。

仏頂面をしていたホークマンの厳つい顔に笑みが浮かぶ。彼は自分も赤い羽根を差し出した。

「バハーワルプルへようこそ、解放軍の勇敢な嬢ちゃん」

「私はグランディーナだ。あなたがカリナか？」
「そうさ。それが来てもらっておいてすまねぇんだが、昨日、うちの大将に話したら怒られちまってよ。紹介してやれそうにないんだ」
「紹介してもらわなくてもかまわない。勝手に会いに行くから、場所だけ案内してくれ。それと彼の名前を聞いておこう」
「本気で言ってるのか？」
「私たちも遊びに来たわけではないからな。ゼテギネア帝国と戦いたいと言ったが、あれは本心ではなかったということか？」
「そんなことあるかよ！　俺は一人でだって解放軍に参加するさ。ただ大将が腰をあげねぇんじゃ、ほかの奴らは動かねぇってことさ」
「さっきから大将と言っているが、何者だ？」
「なんだ、おまえは？」
「わたしはランスロット＝ハミルトン、彼女の護衛で同行している」
「へぇ、まるで騎士様だな。うちの大将はカノープス＝ウォルフってのよ。バハーワルプルにその人ありと言われた、風使いさまよ」
「ゼノビア王国魔獣軍団の一員、シャローム地方の支配者ギルバルド＝オブライエンの元親友殿か。そうと聞いてはその顔を拝んで帰らぬわけにはいかなくなったな。協力を頼んで、なぜ怒るのか、話も聞いてみたいところだ」
カリナは心底驚いたような顔をした。
だが、グランディーナは赤い羽根を手持ちぶさたに回し、ランスロットがグリフォンを繋ぐ場所を探すにいたっては、腹をくくったらしかった。
「ついてきな。グリフォンなら町の入り口に繋げる。だが俺はカノープスんちまで案内するだけだぜ。うちの大将、酒を飲むと人格が変わるからな、紹介まではしてやれねぇぜ」
「上等だ」
バハーワルプルの町は活気にあふれていた。複雑に入り組んだ路地はゼルテニアの里を思い出させなくもなかったが、その幅はずっと広く、すれ違う者もホークマンが少なくない。
そのうちの何人もの者が、グランディーナの赤銅色の髪に振り返った。はっきりと「バルタン」と口走った者もいた。
やがて彼女らが至ったのは、町中のそれほど大きくもない小屋だった。

「ここが大将んちだ。あとは任せたぜ」
グランディーナはその扉を軽く叩いた。ランスロットの予想したとおり、返事はない。
彼女も二度、叩きはしなかった。取っ手に手をかけると鍵もかかっておらず、建てつけの悪そうな音を立てて簡単に開いた。
バルタンは古代高等有翼人の末裔とも言われる、ホークマンとは異なる人種だ。その数は有翼人のなかでも圧倒的に少なく、同じ有翼人であるレイブンの方がずっと多い。だがその小屋は、そんなバルタンの一人が住むにしてはあまりにお粗末な造りだった。
「カノープス＝ウォルフはいるか？　私はグランディーナ、ゼテギネア帝国と戦う解放軍のリーダーだ。あなたと共闘したくて来た」
「なんだと？」
小屋の奥から声がした。続いて、そこら中にぶつかるようにして、一人のバルタンが現れた。
真紅の髪に真紅の翼、顔の色まで赤みが差している。その翼はカリナよりさらに高く、むき出しの上半身には筋骨隆々という言葉がよく似合った。年齢は一見ランスロットより若そうだが、有翼人の常でずっと年上だろう。
「いま、寝言をほざいたのはおまえか？」
カノープスの片手には濁酒の瓶が握られている。言ってから彼はすぐに濁酒をあおり、こぼれた酒が白い筋になった。
「あれが寝言に聞こえるのであれば義勇軍とやらもたかが知れている。風使いの名も過去の栄光だろう」
カノープスの目つきが一瞬凶暴さを帯びたが、すぐに狂ったように笑い出した。
「だったら帰んな、お嬢ちゃん。俺が義勇軍なんてやってたのは昔の話だ。戦いなんてやめたのさ、殴り合いっこに興味はねぇよ」
「義勇軍の代表はあなたではなかったのか？」
「そんなこと誰から聞いたんだ？
カリナ！　おまえか、こんな奴らを案内してきたのは?!」
だがバルタンが飛び出すより速くグランディーナがその太い腕をつかんでいた。カノープスを引き留めるためというより、最初からそちらの方が目的だったように勢いよく地面に引きずり倒す。
その場にいたグランディーナ以外の誰もがしばし唖然とした。
彼女の腕も女性にしては太い方だが、カノープスの

それとは比べものにならなかったからだ。女性としては太い方でもランスロットにも明らかに劣っている。
しかし、カノープスは酔っていた。酩酊状態では反射神経は鈍るものだ。瞬間的な腕力ではグランディーナに分がなかったとも言い切れない。
「何しやがるんだ、この女！」
「あなたがカリナに襲いかかろうとしたから止めた。当然の反応だと思うが。襲わないと約束するなら手を放す」
「ひとを虚仮にするのもいい加減にしやがれ！」
カノープスは酔いが冷めてきた。だが、彼はグランディーナの手をはねのけられなかった。まるで万力でも押しつけられているかのように押さえつけられた腕はびくともしない。
「手を離せ！」
「あなたがカリナを襲わないと約束するなら放す。するのか？」
カノープスは押さえつけられた腕に渾身の力をこめたつもりだったがやはり動かなかった。逆にグランディーナははらわたが煮えくりかえるくらい涼しい顔をしている。
「約束するから手を離せ！」
「わかった」
拍子抜けするほどあっさりと彼女は離れた。だがカノープスの腕にはその指の痕がはっきりした痣となって残っている。
そこが痛んだ。だが彼が起き上がったきり動こうとしなかったのは、その痛みのためだけではなかった。
「だいたい、おまえらは何で来たんだったけかな。もったいねぇ、酒が全部こぼれちまったじゃねぇか」
カノープスの言うとおりだった。濁酒の瓶は彼が地面に引きずり倒された時の衝撃で割れて、酒もとっくに地面に吸い込まれている。彼は瓶の破片を愛おしそうになでた。
その手にグランディーナが手を重ねた。
「何だ？」
「カノープス＝ウォルフ、先ほどの無礼は謝罪する。私たちと一緒に帝国と戦ってくれないか」
「俺の話を聞いてなかったのか。戦いはやめたと言っただろう。俺は戦いを棄てたんだよ」
そう言いながら、カノープスの片方の手は破片を弄んでいる。
「なぜ戦いを棄てたのだ？　あなたはずっと義勇軍を組織して帝国と戦ってきたのではないのか？」

「義勇軍か」
カノープスは自嘲するような笑みを浮かべた。手の中の破片を握りつぶす小さな音が聞こえるのと同時だった。
「そんなものがあったのは昔のことだよ。そうだろうが、カリナ？　義勇軍なんて胸張れるほど、ご大層なことをしたか？　俺たちは何もしちゃいない、他人に自慢できるようなことなんて何もな。解放軍なんてご大層なものが現れて、すがりたくなったおまえを責めやしないが、カリナ、俺たちに義勇軍なんて名乗る資格があったと思うのか？」
「でも大将」
「やめとけよ、カリナ。おまえが俺の部下だったのは二〇年以上も前のことだ。義勇軍の代表にも俺が成り行きで収まっちまったけど、あれはおまえがやっても良かったんだ。もう俺はおまえの大将でも何でもないんだよ」
「彼が君を慕うのは君の人柄の表れだろう。命を預けられると思えるほどの相手に出逢えることは幸せではないのか」
「誰だ、おまえは？」
「わたしはランスロット＝ハミルトン、ゼノビア王国の騎士でいまは解放軍の一兵士だ」
カノープスは、穴が空くかと思われるほどグランディーナとランスロットの顔を交互に凝視した。
カリナも突然出てきたゼノビア王国の名に驚いたようだが、口は挟まなかった。
「解放軍の正体はそれか、ようやく合点がいったぜ。だったら訊きたいことがある。おまえらが戦ってるのは何のためだ？　金か？　名誉か？　正義か？　自由か？　それともゼノビア王国復興のためか？」
「それを訊いてどうするんだ？」
「どうもしねぇ。別に答えなくてもいいんだぜ」
「答えないとは言わないが、私の答えはそのどれでもない。私が戦っているのは何より自分のため、ゼテギネア帝国を倒すためだ」
カノープスばかりかランスロットもカリナも、まじまじとグランディーナを見た。
「解放軍は確かにゼノビア王国の者ばかりだが、私はゼノビアの人間じゃない。これから人が増えるにつれ、さらにゼノビア以外の人間は増えるだろう。私はそれが悪いとは思わないし、この先必要なことにさえなっていくと考える」
カノープスはグランディーナの手を乱暴に払った。

「大した理想だな！　だがそんなものに俺を巻き込むな。俺は戦いを棄てたんだ。ゼテギネア帝国が勝とうが解放軍とやらが勝とうがどっちでもかまわんさ。野蛮人のお仲間になる気はねぇよ」

グランディーナは立ち上がり、カノープスを見下ろした。彼女がそのような尊大を態度をしてみせたことにランスロットは内心驚いた。心なしか握りしめられた拳も強ばって見える。

「ではシャローム地方の支配者、ゼノビア王国の元魔獣軍団長ギルバルド＝オブライエンの生死にも興味はないというわけだな。あなたとは親友同士だったと聞いたが、ギルバルドとは二、三日中に戦うことになる。いかな立場にあろうとゼテギネア帝国に汲みする以上、我々には敵だ。明日には戦端を開く。その生き死にもあなたには関係のないことか、カノープス＝ウォルフ？」

「帰りな」

カノープスは地面に目を向けたまま即答した。

「どこで聞いたのか知らないが、俺がギルバルドと親友だったのは二〇年以上も前の話だ。奴とはずっと会ってねぇし、互いの消息も気にしてねぇ。そんな奴の生死なんてどうして俺が気にしなきゃならねぇんだ。奴を殺したければ殺すがいいさ。名誉も地位もかなぐり捨てて延命だけ考えた奴には裏切り者の死が似合いだろうよ」

「それがあなたの本心とも思えないが、私たちは帰る。朝から邪魔をした」

「痣は作るし酒はこぼすし、とんでもねぇ客だぜ。二度と来るな。今度その面見せたらはっ倒すぞ」

「戦いを棄てた者にはっ倒されるほど私はなまっていない。できるものなら、その壁の鎚の埃を払ってから来るがいい。

行こう、ランスロット」

「待ちな！」

「まだ何かあるのか？」

カノープスはカリナを手招いた。彼が言われたとおりに近づくと、いきなりその顎に強烈な一撃が見舞われて、カリナの身体は十数バス（一バスは約三〇センチ。三メートル以上）も吹っ飛んだ。今度はグランディーナにも止めることはできなかった。

「こいつを連れていけ。確かに義勇軍はあったが、会ったこともねぇ奴にぺらぺらしゃべるような奴はいらねぇ。そいつはおまえらにくれてやる。二度とここには来るな」

ランスロットに助けられてカリナが呻いた。だがランスロットが何か言おうとするのを、グランディーナは遮った。

そしてカノープスは小屋に引っ込んでしまった。

「一度ラワンピンジに行こう。どちらにしてもギルバルドとの戦闘は避けられない」

ランスロットは頷いて、カリナの右腕の下に左腕を突っ込んだ。

「いまは我々と来るがいい。まだあなたに訊きたいこともある」

返事の代わりにカリナはもうひとつ呻いた。だがランスロットに助けられながらも立ち上がって、まだ未練がましそうにカノープスの小屋を見やった。

「彼はまだ戦いを棄てない。案ずることはない、このままにしておく気はない」

ババハーワルプルからラワンピンジまではグリフォンで一時間ほどの距離だった。出発の間際にカリナが自分のグリフォンを連れてきたので、飛行速度が落ちないで済んだのである。有翼人の翼はグリフォンの速さには遙かに及ばないからだ。

「あんたたちには悪いことしちまったな」

「何の話だ？」

「あんたたちに接触したのは俺の勝手だったってことさ。まさか大将があんなふうに思ってるなんて思わなくってよ」

「カノープスに会えれば上出来だ。だが次は別の手を考えなければなるまい」

「次ってまた会うつもりなのか？」

「会わなければギルバルドは死ぬしカノープスも出てきはすまい。私はそのままにしておく気はないと言った」

「グランディーナ、カリナの所属はどうする？」

海を越え、ラワンピンジが見えてきたころ、ランスロットが訊ねた。

「武器は使えるのだろう。しばらくグリフォンも一緒に私といてもらう。そうすればポリュボスを借りる必要もないからな」

「いいだろう。昨日のように君が一人でいるよりはよほど安心できる」

グランディーナは黙ってグリフォンを急降下させた。彼女らが降りるころ、ラワンピンジの入り口にウォーレンらが出迎えていた。

「首尾はいかがでしたか、と訊くまでもなさそうで

すな」
開口一番にそう言ったリスゴーに、グランディーナは軽く肩をすくめた。
「言い訳する気もないしこれで諦めるつもりもない。ラワンピンジには簡単に入れたようだな」
後の言葉はウォーレンに向けられたものだったので、老占星術師は頷いてあとを引き取った。
「我々がウーサーを倒したことを告げると大層な歓迎ぶりでした。町長があなたに会いたがっております。何でもぜひにお願いしたいことがあるとか」
「来たか。ほかの者はどうしている？」
「町長が我々に宿舎を提供してくれました。そこで待たせておりますが？」
グランディーナが一歩下がると皆と向かい合う位置になった。
「全員、宿舎から追い出せ。柔らかい寝台に寝ていて戦争ができるか」
「しかし町長殿のせっかくの心遣いを無になさるおつもりですか？」
「ぜひにと頼みたいことがあるのならば、宿舎など断っても気を悪くはするまい。町長にはこれから会う。わびは私から入れる」
「ですが、皆には何と伝えるのです？」
「私が言ったことを言えばいい。戦いの楽なうちに身体をならしておけ。この先、全ての町が我々を受け入れるとは限らない」
「我々は騎士です、そのような傭兵まがいの真似ができましょうか？」
グランディーナは振り返り、粘るリスゴーを睨みつけた。
「くだらない自尊心にしがみついていなければ戦争ができないならばヴォルザーク島に帰ったがいい。あいにくと私は傭兵あがりだ。体裁にこだわる気はないし地べたに寝るのも慣れている。数で劣る我々が正攻法で帝国に勝てると思うほどおめでたくもできていないのでな。
行くぞ、ウォーレン」
「それでどうするんだい、ランスロットさんよ」
グランディーナがウォーレンとラワンピンジに入ってから、カリナが真っ先に口を開いた。
彼の存在はいままでずっと無視されてきていたので、ランスロット以外の者、リスゴーとマチルダは驚いて彼を見た。

「わたしのことは呼び捨ててかまわない。リスゴー、マチルダ、彼はカリナ、今日から我々の仲間だ。元ゼノビア王国魔獣軍団だそうだな」
「よろしくお願いします」
マチルダが挨拶をすると、カリナは少しだけ赤くなった。
「それではリスゴー、宿舎に案内してもらえませんか。皆に話さなければなりますまいし、野営するのに適当な場所を探すのに時間もかかりましょう」
「あんな暴言に従われるのですか？」
「私はそれほど暴言だとは思いませんわ」
「なぜですか、マチルダ殿？」
彼女は胸に手を置いた仕草で微笑んだ。それはマチルダの癖のようだ。
「ロシュフォル教会の寝所はどれも木ばかりです。私たち僧侶は聖ロシュフォルの生活に倣って清貧を心がけ、勤労と祈りに励みます。リスゴーさまは傭兵まがいと仰いましたが、私たちもあのような瀟洒（しょうしゃ）な暮らしには戸惑いさえ覚えます。私たちの聖地アヴァロン島の大神殿でも生活は似たようなものだとか。要は慣れではありませんか」
ロシュフォル教はゼテギネア大陸最大の宗教だ。ラシュディと同じ五英雄の一人、シャロームの皇子ロシュフォルが、アヴァロン島出身の僧侶ラビアンと結ばれ、起こした教えである。ゼテギネア帝国下では太陽神フィラーハを最高神と崇めるその教えは禁教とされていた。帝国の宗教は女帝エンドラをフィラーハの上に置くゼテギネア教だからだ。
だがどんなに小さな村や町にも教会を持ち、僧侶の勤めるこの宗教を、帝国は根絶やしにすることはできなかったのであった。
女性のマチルダに「瀟洒な暮らし」と言われては、いくら宗教上の理由とはいえどもリスゴーにもそれ以上強硬に反対する理由もない。
カリナと二頭のグリフォンをその場に残して、ランスロット、リスゴー、マチルダの三人は皆が休んでいるという宿舎に向かったのだった。

「これから人数も増える。そのたびに好意とやらに甘えていたのではきりがないし好意の負担も大きくなるばかりだ。負担と感じればそれは好意ではなくなる。義務になれば我々の存在意義が危うくなる。どちらにしても場所によって野宿は避けられない。いまのうちに身体をならしておかないといざという時に辛いぞ」

グランディーナはそう一気にまくし立てた。
「申し訳ありません。わたしが気づかぬばかりによけいなことを。ですが、あのような言い方をしなくとも、リスゴーもわかりましょうに」
「別に怒ってるわけじゃない。それにリスゴーが反対するのは騎士の体裁ばかりが理由ではあるまい。気づいていながら何の策もしなかったのは私の過ちだ」
ウォーレンは思わず彼女の腕をつかんだ。二人はもうラワンピンジの町長の屋敷の前まで来ていた。
「待ってください。リスゴーのことで何を気づいていたと仰るのです？」
「どこの馬の骨ともわからぬ傭兵がリーダーになっていることを快く思わない者がいる。気づいていたなどと驚くほどのことではあるまい？」
「そうでした」
「それとガルシアン＝ラウムを知っているだろう」
「ええ、名前だけは。魔獣軍団の副団長でギルバルドの片腕の一人とも言われていました。だが彼は十年以上前にに処刑されたと伺いましたが？」
「そうだ、魔獣軍団員のなかでも数少ない処刑者の一人だ。しかも殺されたのは彼一人、騎士団のように一族根こそぎじゃない」
ウォーレンは手を放した。
「気づいたようだな、ウォーレン。これから会うのがその父親だ、ラワンピンジの町長を務めている。ギルバルドを帝国の犬と誹る者は少なくないが、そのなかでも有力者の一人だ」
「いつの間にそれだけの情報を仕入れられたのです？」
「おかしなことを訊く。影を寄越したのはあなたの方じゃないか。それにシャローム地方で聞き込めばこれぐらいの情報はすぐに入る。ギルバルド＝オブライエンは厳格な為政者だが、民の口は塞ごうとしていないからな。彼のことを犬と誹る者もあれば、敬称をつけて呼び、感謝の意を表す者も少なくない」
「そうでしたね。迎えが来たようです。続きはまた後で聞かせていただきましょう」
「ようこそ、ラワンピンジへ。わたしが町長のサイクス＝ラウムです。あなたのような若い女性が解放軍のリーダーとは思ってもみませんでした」
サイクスはウォーレンよりも高齢のようだ。だが枯れ木のようなその身は背筋を真っ直ぐに伸ばしており、矍鑠（かくしゃく）とした印象を与えた。

「私はグランディーナだ。早速だが、話というのを聞かせてもらおう」
老人の眼差しが厳しいものとなった。だが彼は、黙って見つめるグランディーナの視線に気づいてか、先に目をそらした。
「頼みというのはほかでもありません。あなた方はこれから帝国軍と戦われるのでしょう。ギルバルド＝オブライエンを討つのに、ぜひわたしにとどめを刺させてほしいのです」
グランディーナは指を組み、顎を載せた。
「差し支えなければその理由を訊いてもいいか？」
サイクスはグランディーナを見た。矍鑠とした印象が急に沈み込み、彼は力なく椅子に座り込んだ。
「わたしの息子はかつてギルバルドの副官でした。あれが処刑されたのは奴のせいです。そうでなければ、なにゆえ元軍団長が生き残り、副団長が先に処刑されますか？　ギルバルドがわしの息子を殺したも同然です。奴はゼテギネア帝国の犬に成り下がったんだ！」
「わかった。ギルバルドを捕らえられた時にはあなたに連絡する。だが、戦闘中に我々が倒してしまわないとも限らない。その点は了解してもらえるか？」
「それならば、わたしがあなた方に同行させていただくわけにはいきませんか？」
「非戦闘員を庇って戦えるほど我々も余裕がない。それ以上の約束はできない」
「わかりました。その代わり、ギルバルドを捕らえた時には必ずご連絡を」
「約束する」
グランディーナは立ち上がり、部屋を出ていきかけてサイクスを振り返った。
「せっかく提供していただいた宿舎だが使うのは遠慮したい。好意だけいただいておく」
「わたしはそんなつもりでは」
「あなたの好意を疑う気はないが、よけいな前例は作りたくない。失礼する」

「このことも予想されていたと仰いますか？」
外に出てからウォーレンが訊ねた。
「サイクスの事情と態度を見れば簡単だろう。同行まで申し出るとは思わなかったがな」
「ですが、あなたが義勇軍と会ったのは無関係ではありますまい。彼らにこだわるのもサイクス殿の意図には反しておりませんか？」
「サイクスのためだけに戦っているわけじゃない。

どんな悪党にも殺したくない奴の一人はいるものだ。だがギルバルドの場合はそれが両極端に思えた。だから彼には会ってみたい」

「義勇軍のことはどうするのです？」

「彼らのリーダーがあなたの言っていたカノープスだった。ギルバルドのことも振ってみたが、いまのところは期待できない。カリナは義勇軍の一人だ。カノープスがよこしたので連れてきた。魔獣軍団員だからおもしろい話が聞けるかもしれないな」

話しながら二人はラワンピンジを出た。

町から少し離れた草原に解放軍の面々がいて、野営地を設営し始めている。指揮を執っているのはランスロットだった。

皆に交じってカリナも働いている。ホークマンの若者は、早くも皆にうち解けたようだ。

「早かったな」

「マチルダがリスゴーを説得してくれたからさ。彼女に礼を言うといい」

グランディーナはランスロットに言われてマチルダを見たが、彼女は夕食の支度で忙しそうだった。

「カリナ！　訊きたいことがある。来てくれ」

「おう。悪いな、俺はちょっと抜けさせてもらうぜ。何だい、リーダー？」

彼と入れ替わるようにウォーレンが皆に交じった。もっともカリナのように力仕事は任せられないから指揮専門だ。それでランスロットが力仕事にまわった。

グランディーナは顎をしゃくり、野営地から離れた。その髪が夕陽を浴びて真っ赤に輝く。

「ギルバルドとカノープスについて、あなたの知っていることを教えてもらいたい」

「うへぇ。やっぱりその話か。俺も魔獣軍団に長いわけじゃないから団長のことはよく知らないぜ」

「いまは情報が欲しい。ギルバルドのことはそれほど知らなくてもカノープスとは長い付き合いなのだろう？」

グランディーナが振り返るとカリナは目を細めて彼女を見た。

「ああ。俺は魔獣軍団のころからあの人の部下だからな。だけど、そんな話を聞いてどうしようって言うんだ？　あんたは団長と戦うって、団長は敵だって大将に言ったじゃないか」

「わかりきったことを訊くな。このままいけば、ギルバルドは間違いなく敵だ。だが私はこのままにしておくつもりもないとも言ったぞ」

「だからってどうするんだ？　まさかあんたになら
この状況をどうにかできるとでも言うのかい？」
「どうにかできるのではなくどうにかする。だから
あなたに協力を頼んでいる。あなたとて、このままギ
ルバルドと戦うのは本意ではあるまい」
「まぁ、あの人には世話になってるからね。俺だけ
じゃない、魔獣軍団にいた奴で団長に恩義を感じて
ねぇ奴はいないはずだからな」
「恩義？　ギルバルドが帝国と戦わずに降伏したの
は有名な話だ。なぜ恩義など感じる？」
「事情も知らねぇで知ったふうな口をきくな！　団
長がいなかったら魔獣軍団だって帝国に根こそぎやら
れていたろうさ。俺たちがこうしていられるのは団長
のおかげなんだ」
「それはあなた個人の意見か？　それともほかの誰
かの受け売りか？」
「可愛くねぇ女だな。俺がすごんでるのに、びびり
もしねぇんだからよ」
「くだらないことで話を逸らすな。あなたに勝てる
のにびびる必要などあるか。私は ――――」
カリナは担いでいた鎚をいきなり振り降ろしたが、
グランディーナは後ろに跳んで避けた。

当たっていれば骨折も免れなかったろうが、鎚は地
面にめり込んだだけだった。
「俺に勝つだと?!　手合わせもしねぇでかい口を
たたくな！　来い！　その鼻っ柱叩き折ってやる！」
激昂したカリナにグランディーナは挑発的な笑みを
浮かべ、自分も曲刀を抜きはなった。
「おもしろい。痛い目に逢わなければわからぬ単純
な輩は私も嫌いじゃない。力しか信奉できぬなら、そ
の目で力の差を確かめるがいい！」
言うや否や先に攻めたのはグランディーナだ。
速さにカリナが一瞬臆したその隙を彼女は逃さな
かった。彼に反撃さえ許さず、立て続けに打ち込んだ。
有翼人が好んで使う鎚はその重さのために手数が少
ないのが欠点でもあり特徴でもある。手数の多い相手
と戦う際には、一撃の威力でねじ伏せるしかない。
だがグランディーナの一撃は軽くなかった。むしろ
手数の多さでも威力でも圧倒的にカリナを上回ってい
て容赦もない。
さんざん打たれ放題に打たれて、彼は降参した。
「何をしているんだ、二人とも?!」
血相を変えてランスロットが跳んできた。傍目には
グランディーナがカリナを虐めているようにしか見え

なかったのだろう。
「お互いの強さを確かめていた。納得したか？」
「ああ、俺が悪かった。あんたの勝ちだよ」
言いながらカリナは横になる。
有翼人はその大きな翼のせいで滅多に横にはなりたがらない。そうと知っているのでランスロットは少なからず驚いた。
グランディーナだけが何事もなかったような顔だ。
「それではそのままで話を聞かせてもらおうか。カノープス＝ウォルフについてあなたの知っていることを話してくれ」
「俺が魔獣軍団に入ったのはゼノビア王国が滅びるちょっと前のことだ。大将、団長、ガルシアン副団長の三人のなかじゃ、大将がいちばん早くて団長とガルシアンがほとんど一緒に入団したらしい。次の団長を決める時に、王はギルバルドを団長にしたらしいんだけど、そのことで大将と団長が喧嘩したって聞いたことがあった。俺が入った時には団長はもうギルバルドに決まってたけどな。大将は面倒見がいい人だし、バルタンだから、俺たちホークマンはみんな大将の下にいたんだ。大将って呼んでるのはその時からさ。だから、大将が団長と喧嘩別れした時にホークマンはみんな、ついていった。別に団長が嫌いだったわけじゃないんだけど、あの時はみんな、頭に血が上ってたからなぁ」
カリナは少しだけ、そのころを懐かしむような顔だ。ホークマンにとっても二四年は長い歳月だろう。ましてや人間ならば世代交代をしてもおかしくない年数だ。
「カノープスに家族はいないのか？」
「いるぜ。大将には五つ歳の離れたユーリアって妹がいるんだ。これが可愛い娘でよ、すごく歌がうまいのさ。まだゼノビア王国が無事だったころ、何回か魔獣軍団に遊びに来たことがあって、優しい娘だったし、ホークマンて女が少ないもんだから、みんなに好かれてたのさ。いろいろと作ってきて差し入れしてくれるし、歌は聞かせてくれるし、ユーリアが来てくれるのが楽しみだったな。それがいつの間にか団長といい仲になっててよ、意外と手が早いんだよなぁっていうか、団長はいい奴なんだけど、大将とユーリアはバルタンだし、何で人間なんかとって噂になってたことがあったねぇ。だけどそのうちに王は殺されちまうし、帝国がやってくるし、ユーリアはどこ行ったんだか、大将のところに何回か来てたのは見たんだけどなぁ」
グランディーナはカリナの側に腰を下ろした。

ランスロットがそこに近づいたが、彼は何も言わなかった。
「カノープスがギルバルドと仲違いしたのは帝国が侵攻してきた時か？」
「そうさ。団長が降伏するって言ったんだけど、大将が反対して、ガルシアンも団長についたんだ。大将はもともと魔獣軍団のなかでもこれといった地位にあったわけじゃなかったんだけど、それで有翼人が大将に、人間が団長につくような形ができあがっちまったのさ。二人ともかなり話し合ったらしいんだけど、最後は喧嘩別れみたいなもんだったって大将が言ってたな」
グランディーナは少し考え、また訊ねた。
「ギルバルドとユーリアは公認の仲か？」
「へへっ」
「何がおかしい？」
「あんたが色気のない話し方するからさ」
「よけいなお世話だ。訊かれたことに答えろ」
「へいへい。団長とユーリアのことはみんな見てみぬふりってやつさ。けっこうお似合いのカップルだったんだぜ。大将はバルタンの長老からかなり言われたらしいけど、もともとあいつら無理言うって聞かされたことがあってよ。大将たちはそれが嫌でバルタンの里を出たって話だったぜ。だからまぁ、誰のお咎めがあるってわけじゃなかったし。でも団長いい奴だったからなー、内心じゃ応援してる奴も多かったって聞いてる」
「ならばユーリアはバルタンの里に戻ったのではないのか？　帝国が捕らえればギルバルドとカノープス双方へのいい人質になる。バルタンの里ならば帝国の手も伸びにくかろう」
カリナは突然、跳ね起きた。が、すぐに地面に突っ伏してしまう。
「そんなこと許せるものか！　ユーリアは俺たちのアイドルなんだぞ！　いててて」
「あなたの身体ならば明日には痛みも引くだろう。眠れないようだったら、マチルダにニワトコを煎じてもらうといい。
ユーリアがどこにいるか知っているか？」
「知らねぇ。大将も知らないらしいんだ。何年か前に喧嘩したらしくってそれっきりさ。大将の虫の居所が悪いのはそのせいもあると思うんだ。大将はユーリアを可愛がっていたからな。
ニワトコって何だよ？」

「打撲に効く薬草だ。
義勇軍がどんなことをしていたか話してくれ」
カリナはずいぶんばつの悪そうな顔をした。グランディーナだけでなくランスロットがいたせいもあったろう。
「義勇軍なんて言ってはいるけど、実は大したことやってたわけじゃないんだ。ゼテギネアから脱出させてやったり、威張りくさってる帝国の奴らを痛い目に逢わせてやったり。シャローム地方にいられないけど、ゼテギネアを離れたくないって奴はジャンセニア湖とかマラノへ連れてってやったりもしたけどよ。大将の言ってたとおりさ」
「ギルバルドがそれを見逃していたのか？　ずいぶんと人のいい男のようだな」
「だから大したことやってないんだって。でも団長は俺たちだってわかってるんじゃないかって大将が言ってたことがあったな」
「ほかに何かあるか？」
「いや、俺が教えられるのはこれくらいだ」
「ありがとう。
二人とも先に行っててくれ。私はまだ考えたいことがある」
ちょうどマチルダが三人を呼びに来ていた。
それでランスロットとカリナが立ち去り、あとにはグランディーナだけが残された。
陽はもう沈んでいた。もうじき辺りは暗闇に包まれるだろう。春の日はまだ短い。
だが彼女が振り返ると、そこに二人の影が控えていた。一人はまだ幼さの残る若者だが、解放軍での働きは二人とも人一倍と言って良かった。
二人は元々ウォーレンに仕える下級忍者だったが、グランディーナが解放軍のリーダーになると同時に指揮権も引き渡したのである。情報収集が主な役割だ。
「ユーリア＝ウォルフの所在はつかめたか？」
二人は同時に首を振った。
「わかった。あなたたちは先にジャンセニア湖へ行ってくれ。天狼のシリウスという男について気になる噂を聞いた。奴の正体を確かめておいてほしい」
二人は顔を見合わせたが、それぞれ頷いた。
「シャローム地方はまだ二日はかかる。四日後にトラブゾンで成果を聞かせてくれ」
「わかりました」
二人がいなくなるとグランディーナは南方をしばらく眺めていた。

彼女がようやく立ったのは、マチルダが二回目に呼びに来てからのことであった。

「帝国が動き出さぬうちにバンヌ、チャンジガルを落とす。だが今回は帝国軍のなかに元魔獣軍団員が混じっている可能性が高い。敵は無力化するだけにとどめ一刻も早くペシャワールを落とすことを優先させろ。幸運を祈る」

影竜の月十五日、解放軍の各部隊はそれぞれペシャワールを目指して進軍を開始した。

ペシャワールはシャローム地方の中心都市であり、ギルバルドの住まう町でもある。ここを落とせばシャローム地方はゼテギネア帝国の頸城(くびき)から解放されることになるのだ。

よく街道が整備され、これといった困難な地形もないため、ラワンピンジからペシャワールまでの進軍はたやすい。だが、シャローム地方に七つある町の門戸をそれぞれ開きながらとなると進軍方向を三つに分けねばならない。

グランディーナは帝国軍と戦闘になる確率のいちばん高いバンヌ、チャンジガル方面にリスゴー、ガーディナー、それにマチルダの部隊を向けた。

海を越えてバハーワルプルを経由する方向にはロギンスの部隊を、バンヌやチャンジガルの裏を廻るサジガバードにはウォーレンとランスロットが廻った。

その日の夕方までには帝国軍の散発的な抵抗に逢いながら、バンヌ、チャンジガル、バハーワルプル、サジガバードの各町が解放軍に門戸を開いていた。支配者であるギルバルドが率先してゼテギネア帝国に降(くだ)った割に、シャローム地方の人びとは反骨精神が旺盛のようだ。

残ったのはペシャワール以外ではレニナカンとアナトリアだ。どちらも街道から外れており、戦略上の重要性は低い。勝敗は決まったようなものであった。

南西にペシャワールを望むチャンジガル郊外に、解放軍は二日目の野営地を設置した。

ラワンピンジほどではなかったが、どこででも解放軍は歓迎された。

だが昨日の教訓は生かされて、グランディーナがチャンジガルに到着したころには野営地はできあがっていた。

グリフォンを使えばラワンピンジからチャンジガルまでは二時間ほどだ。グランディーナはカリナとラワ

ンピンジに待機していたのだった。
「どうする？　俺はラワンピンジまで戻った方がいいかい？」
「今日はいい。明日の朝、ペシャワールへ行く前にウォーレンとラワンピンジに戻り、ラウム町長を連れてきてくれ。ロギンスのグリフォンも連れていけ」
「ラウム町長？　何でペシャワールに行く前じゃなきゃならないんだ？」
「彼と約束をしている」
「やっぱり団長と戦うのか？　それに町長と約束って何をだよ？」
答えようとしてグランディーナはカリナを制した。ウォーレンとランスロット、それにガーディナーが近づいてくるのも身振りで止めた。
「報告は後で聞く。ついてくるな」
彼女は野営地を離れた。チャンジガルの南を流れる川まで歩いていく様子は、散歩としか見えない。
川縁でグランディーナは振り返り、誰もついてきていないのを確かめた。夕餉の支度をする煙が野営地から上がっている。腕を組んでそれを眺めながら、彼女はどこに向けるともなく言った。
「姿を現したらどうだ。帝国の差し金か？」
返事の代わりに降ってきたのは稲妻だった。
グランディーナが曲刀を抜いて地面に突き刺し後方に跳ぶと、そこに稲妻が落ちた。
さらに火の玉が飛んできて、彼女はすかさず曲刀を握りなおし、剣風でそれを薙ぎ払ったが、髪がわずかに焦げて、火ぶくれが少しできた。
「何者だ?!」
今度は彼女もあらぬ方向を見ていない。一点を見据えているとじきに、忍者装束に身を包んだ端正な顔立ちの青年が現れた。
彼はグランディーナの前まで来て片膝をついた。
「無礼はお詫びします。わたしはシャローム地方の執政官ギルバルド＝オブライエンの使いで来ました」
グランディーナは曲刀を鞘に収めた。前髪を払うと焦げたところがこぼれた。
「ギルバルドは何と言ってきた？」
「これ以上、互いに血を流しあうのは無益、リーダー同士の一騎打ちで決着をつけたい」
「その返事はあなたが持って帰るのか？」
「いいえ。わたしはただの伝達役です。ギルバルドは待つと言っていました。一人で行くも軍を率いて行くもあなた次第、その反応で判断するのだそうです」

「それで、あなたはこれからどうするつもりだ？その口振りからするとギルバルドの部下だったとも思えないが？」
「わたしは失業中の身です。元は帝国兵でしたが仕える主人を失ったので特に当てもありません」
グランディーナは彼を眺めた。これで騎士の格好でもしていれば女性が放ってはおかないような優男だ。
「立ったらどうだ。それとあなたの名前をまだ聞いていなかったな」
「聞いてどうしようというのです？」
そう言いながらも、彼は言われるままに立ち上がった。身長はグランディーナより高い。ランスロットといい勝負だろう。
「どうせ帝国に義理立てする気もないのだろう。我々と一緒に来たらどうだ。それには名前も知らないのでは不便だからな」
彼は心底驚いたような顔をした。
「わたしはアラディです。アラディ＝カプラン。あなたは帝国の間者を信用するというのですか？」
「信用すると言った覚えはないが、オファイス人が帝国に忠誠を誓っているようにも見えなかったので来いと言った。私は人使いが荒いがな」
「ギルバルドの言ったとおり、おもしろい方ですね。わたしに何をしろと言われますか？」
「ユーリア＝ウォルフは知っているか？　行方を知っていたら教えてくれ」
「知っているわけではありませんが、時間をいただければ調べましょう」
グランディーナはアラディに背を向けた。
「期限は明日の朝までだ。あなたが戻らなければ私はペシャワールへ行ってギルバルドを討つ」

彼女が野営地に戻るとリーダーが集まっていた。ほかの者は思い思いに休んでいるようだ。
「稲妻の音が聞こえましたが、帝国兵に襲われましたか？」
ウォーレンはさすがに魔術師だけあって、その手の音には聡い。
取り置かれてぬるくなった夕食を食べながら、グランディーナは適当に頷いた。
「それよりも今日の報告を聞こう。大して話すこともないだろうが」
「わたしとリスゴー殿の部隊が二回ずつ帝国軍と戦闘しただけです」

ガーディナーがそう言うと、グランディーナは先を続けるよう促した。
「帝国軍と言っても、ほとんどは魔獣軍団の者が駆り出されているようです。幸い、誰も倒さずに済みました。彼らはギルバルドへの忠誠心は厚いようです。ギルバルド次第では我らの味方になってくれるかもしれません」
「バハーワルプルとサジガバード方面では何かあったか？」
「こっちは何も。カノープスにもお目にかかれませんでしたよ」
バハーワルプルに廻ったロギンスが即答した。
続いてランスロットも答える。
「アナトリアに一〇〇年以上も生きている魔女がいるという噂を聞いた。人間だけでなく有翼人も一目置く人物らしいが、偏屈でも有名だそうだ。何でもグラン王にも意見できたほどの実力者らしい」
ウォーレンが頷いた。同じ魔術に携わる者として、有名人のようだ。
「会ってみたいな。どうせ来るのだろう？」
最後の言葉はランスロットに向けられたものだ。
彼が頷くとグランディーナは立ち上がった。食事は済ませており、マチルダが黙って盆を下げた。
「ロギンス、ポリュボスを借りていくぞ」
「明日の行軍はどうしますか？」
「朝話す。休んでおけ」

「ごまかしたが、さっきは何があったんだ？」
上空に出るとすぐにランスロットが言った。
チャンジガルからアナトリアまでは途中にレニナカンを挟んでほぼ直線で結べる。夜間とはいえ、レニナカンの灯を目指していけば空からならば迷う心配もなかった。
「影を一人雇い入れた。その挨拶がわりだ。別にごまかしたわけじゃない」
「そのような人物に信頼を置けるのか？」
「解放軍も一枚岩というわけではあるまい。いろいろな人間がいた方がいいだろう」
「それでその影はどんな用事で来たんだ？」
「ギルバルド＝オブライエンの伝言を持ってきた。彼と私とで一騎打ちをして決着をつけようと」
「ギルバルドらしいな。これ以上、兵が倒れるのを嫌がったのか」
「なぜそう思う？」

「元魔獣軍団員ではなくても彼に恩義を感じている人間は少なくない。ギルバルドのおかげで助命された者もいるし、そもそも彼が帝国に降伏しなければ、シャローム地方も戦火に焼かれたと言う古老もいた。カノープスが言っていただろう、名誉も地位も棄てて延命だけ考えたと。だがギルバルドは自分の命より、魔獣軍団員やシャローム地方の民の命を優先したのではないかと思ったのでね」

チャンジガルからアナトリアまではグリフォンならば夜間でも一時間ほどの距離だ。

アナトリア目指してグリフォンは下降した。その町の灯はレニナカンよりも小さいもので、地上から行けば森に埋もれてしまう。

グリフォンを立木に繋ぎ、二人は町に向かった。夜間でもあり門は閉ざされている。

「どうするんだ？　アナトリアは元々自治都市などと陰口をたたかれるほど独立精神の強いところだ。旧ゼノビア王国の時代にも王の威光が届かぬので有名だった。こんな時間に門は開けてもらえないぞ」

グランディーナが答えようとすると二人のあいだに人影が降ってきた。

ランスロットが押しとどめる間もなく、彼女はその影に近づく。それはアラディだったのだ。

「奇遇だな、ここで会うとは」

「はい。これからお知らせに戻るところでした」

「見つかったのか。私たちはこの町で有名な魔女に会いに来た。

ランスロット、彼がさっき話した影だ。アラディ＝カプランだ。

アラディ、彼はランスロット＝ハミルトンだ」

ランスロットが近づくとアラディは立ち上がり、差し出された手を握り返した。いまは忍者装束ではなく、ごくふつうに見かけられる町民のようななりだ。

「見つかったとは誰か探させていたのか？」

「有名な魔女というのはババロアのことですか？」

ランスロットとアラディが同時に言った。

「君はババロアを知っているのか？」

ランスロットの次の言葉はアラディに向けられたものだ。

「ええ。ユーリア＝ウォルフはそこにいます。魔女ババロアには帝国も手が出せなかったのでしょう」

「ババロアに会おう。話はそれからだ」

「案内しましょう」

当然のようにアラディが先に立った。

影らしく、彼はアナトリアの壁を越えて侵入したようで、グランディーナとランスロットにも同じ経路を示した。

「アナトリアは陽が落ちると門を閉ざし、よほどの急用でなければ開きません」

「だからと言って、こそ泥のように侵入するのもどうかと思うが」

「外で待つか？」

アラディが真っ先にアナトリアに入り、グランディーナ、ランスロットの順に侵入することになっていた。

「リーダーだけ単独行動させるわけにはいかない。解放軍が侵入というのも体裁が悪い話だな」

「緊急事態だ。文句があるならば外で待て」

傭兵という経歴上、グランディーナはこうした行動に慣れているらしい。身軽に綱を使って壁を登り、アナトリアに入っていった。

「文句は山ほどあるが、万が一見つかった時に身代わりが必要だろうということだ」

そう言いながら、ランスロットも軽々とアナトリアの壁を乗り越えた。後は休むだけだったので、鎧を脱いでいたのが幸いした。

二人を待っていたアラディが綱を回収する。どこに綱など持っているのかというほど軽装だ。

通りは暗いが、夜警のものらしい足音が響いた。アラディはそれらを巧みに避けて、ババロアの家の前まで二人を案内した。

アナトリアにその人有りと知られた魔女の家には大きな木が一本、天を突くように立っている。

「あの木がババロアの家の目印です。とても長寿の木で、オウガバトルのころに植えられたらしいという噂もありました」

「あれはアカシアだろう。ババロアというのは大した魔法の使い手らしいな」

「アカシアをご存じか？」

暗がりから声が聞こえた。年寄りのもののようだが、男とも女とも判別しづらい声だ。

「秘儀の伝授と知識の概念の象徴だ。だがミミルの泉は枯れている。太陽と、再生と不死の象徴をもって、泉の水を満たせよ。不死を知るために死を知れ。だが私はその器ではない。私の庭に木は栄えない。願わくば、あなたの木の栄えんことを」

「それは奇なことを仰せだ。だが理（ことわり）を知る者に扉は開かれるもの、入ってこられるがよい」

扉が音もなく開け放たれた。それで声の主は、この家の主人、魔女ババロアと知れたが、ランスロットとアラディにはまるで道理のわからぬ話である。

「わたしはここで待とう。アナトリアまでつき合うという役目はもう終わったのだからな」

「わたしも外で待たせていただきます。理のわからぬ者が勝手に扉をくぐらぬ方がいいでしょう」

グランディーナは二人の言葉に黙って頷く。彼女を見送ってからランスロットはアラディに声をかけた。

「そう言えば、君にはまだ歓迎の言葉を言っていなかったな」

「影にかしこまった挨拶など必要ではありますまい。ここでお会いしなければ、わたしのことなど知ることもなかったでしょう」

「そう言うな。君も解放軍の一員になるのだろう。歓迎するよ、アラディ。君の役割は決して小さなものではないとわたしは思っているのだがね」

「あなたは変わった方ですね。解放軍とは皆、そのようなものなのですか？」

「さあ、どうだろうな」

戸をくぐると真っ暗な通路だった。

グランディーナが真っ直ぐに進んでいくと、あのアカシアの木が植えられた庭に出た。夜だというのにそこだけ昼間のような明るさだ。木の下に卓と椅子があって、そこに魔女らしき人物と明らかにバルタンとわかる女性が座っていた。庭そのものも狭くない。まるでアナトリアの町に接する森に入り込んだようだ。

「解放軍のリーダーであろう。よくババロアの庭に参られたな。ここまで来た御仁は多くない。私が自ら招いたなかでは、おぬしは十二年ぶりの来客だ」

「私はユーリア＝ウォルフを探していた。せっかく扉を開いてもらったが、彼女を連れていきたい。かまわぬだろうな？」

「解放軍の方が私をどこへ連れていこうと言うのですか？」

その一言で彼女は自らユーリアだと認めたようなものだった。だがグランディーナが答えるより早く、ババロアが口を挟んだ。

「気持ちはわかるが慌てなさるな。夜明けまでにはまだまだ間がある。どうせ奴はそれまで起きるまい。夜明けに着くように出れば間に合うであろうが？」

ババロアはそう言って空いている椅子を勧めたので、グランディーナも黙って腰を下ろした。

「それでは私の問いに答えていただけませんか？」
ユーリアもカノープスと同じ真紅の髪と翼を持っていたが、彼のような燃えるという印象は受けなかった。
「私はグランディーナだ。あなたの兄カノープス＝ウォルフとギルバルド＝オブライエンを解放軍に引き入れたい。あなたの力を貸してもらえないだろうか」
「ギルバルドさまと兄を、ですか？」
「昨日カノープスに会ったがいい返事はもらえなかった。それであなたのことを聞いたので協力してもらえないかと思って探していた」
ユーリアはグランディーナをしばらく見つめた。
「兄は卑怯者です」
やがて彼女が発したのは意外な言葉だった。
「ギルバルドさまがたった一人で帝国と戦い続けているのに、兄は真っ先にギルバルドさまを見捨てました。グラン王が暗殺されたと聞いた時、ギルバルドさまはすぐに帝国に降伏しました。騎士団と魔法軍団の方々と力を合わせて、ゼノビア王国として戦うべきだと誰もがギルバルドさまに言いました。ですが、ギルバルドさまは別れ際、私にこう言われました。
『戦って亡き王に忠誠を捧げて名誉の戦死を遂げる道もあるだろう。だが帝国と戦えばこのシャローム地方が戦火に巻き込まれよう。魔獣軍団ばかりか民にも死者が出るだろう。わたしたちに守るべき家族がいるように戦った帝国兵にも家族がいるだろう。戦いは大勢の避難民と孤児と未亡人を生み出すことになるだろう。生き残った者は帝国を憎むように我々を憎みもするだろう。それならば、わたしは帝国に降伏する。わたしの首と引き替えに平和を守れるのなら人と人が憎みあわずに済むのならこんなに安いものはあるまい』
けれど、ギルバルドさまは、帝国の命令でそのままシャローム地方を治めることになりました。魔獣軍団の方々も兄に追従した有翼人以外の方はギルバルドさまのもとに残ったのです。私もギルバルドさまを帝国の犬と誹る声があるのは知っています。でも、そう言う人たちは、ギルバルドさまが降伏する道を選ばなければ、自分が死んでいたかもしれないことを棚に上げています。そのことでいちばん傷ついているのはギルバルドさまなのに、どうしてそんな勝手なことが言えるのでしょう?!」
「私はあなたの問いには答えられない。ただあなたがカノープスのことを誤解しているようだから言っておく。彼は卑怯者ではないし、ギルバルドの心情も理解している。きっかけをつかめないでいるだけだ」

「あなたは私にそのきっかけになれと言うのですね？　それは事情を知らないから言えるのです。私だって何度ギルバルドさまと兄を和解させようと思ったことか。何度、兄を説得しようとしたことか。すべて無駄足でした。兄を説得する方法など私が知りたいぐらいです」

ユーリアの最後の言葉は嘆息とともに吐き出された。

グランディーナはその横顔を眺めていたが、唐突に訊ねた。

「この赤い羽根の由来を知っていたら教えてもらえないか」

彼女が出したのは、カリナと初めて会った時に互いの確認に使った物だった。だが、ユーリアは突然、目を輝かせてそれを引ったくった。

「これは！　偽物じゃありませんか！」

「当たり前だ。それは私が拾った羽根を赤く染めただけだ。だがカリナが赤く染めろと言った理由を彼にもカノープスにも訊きそびれた」

「カリナに会ったんですか？」

「そうだ。順番が逆になったが、私をカノープスに会わせたのはカリナだ。彼らも無為な二四年間を過ごしたわけじゃない。義勇軍を結成して帝国に抗おうとしていた。その活動は微々たるものだったようだが」

「でも兄は、戦いをやめたと公言していたはずです。どうしてそんなことを？」

「そうすれば帝国の警戒は薄れる。魔獣軍団内でも団長と張り合えるほどの実力者ならば監視の目がついてもおかしくはあるまい。どれが最良の選択だったかなど誰にもわからない」

ユーリアは立ち上がった。彼女はグランディーナの目には真っ暗な空間にしか見えないところに入り込み、すぐに真紅に輝く羽根を一本携えて戻ってきた。大きさといい、色といい、グランディーナのそれとは比べものにならないような立派な羽根だった。

「これは火喰い鳥の羽根です。グラン王がギルバルドさまを団長に選ばれた時にくださったもので、魔獣軍団の証ともされていました。カリナはきっとそのことを覚えていたのだと思います」

「夜明けまでにバハーワルプルに着きたいのなら、そろそろ発たれてはいかがかな。ここからはどんなに急いでもいまが潮時だろうて」

いままで石のように押し黙っていたババロアが口を開いた。

ユーリアは驚いて彼女を見、その手を握りしめた。

「お婆さま、私は ――― 」
「行くがよい。そしておぬしとギルバルド、それにカノープスの揃ったのを見せに来ておくれ」
「でも、私 ――― 」
「何を大げさなことを。これが永の別れになるわけじゃあるまいし。またいつでも帰ってくるがいい。おまえたちのために門戸は開いている。そして私の無聊を慰めておくれ。おまえの歌声はこれから大勢の人を慰めるだろう」
「はい！」
グランディーナはすでに立っていたが、ババロアが逆に彼女を招いた。
「先にお行き、ユーリア。婆はこの御仁に用がある。さあ、こちらへ」
「お元気で、お婆さま」
ユーリアの姿が見えなくなると、ババロアは初めて立ち上がった。その年老いた小柄な姿は道ばたの石像にも見える。
「何の用だ？　発てと言ったのはあなただぞ」
「すぐに終わる用だ。おぬしにこれを渡しておこうと思ってな」
ババロアが差し出したのは小さな藍青石の板だ。
「わたしには姉が二人いる。マンゴーはカストラート海に、タルトはライの海にいるはずだ。この板を持ってゆけば、姉たちも助力してくれよう」
「伝える言葉はないのか？」
「自由の身となる者には言葉など不要。姉たちとは泉のほとりで再会できよう。せめて、おぬしたちの無事を祈らせてもらおう」
グランディーナは両手で板を受け取った。
微笑んだババロアの姿が砂のように崩れて、明るかった庭が真っ暗になった。アカシアの葉ずれの音だけが変わることなく聞こえる。
暗闇に踏み出すと、外の風が冷たく感じられ、グランディーナは一寸先も見えぬ中、その感覚だけを頼りに外に出ることができた。
外で待っていたのはユーリアとアラディだった。
「ランスロット殿はグリフォンのところです。戻りますか？」
「あなたとランスロットは我々の野営地で降りてもらう。私とユーリアはバハーワルプルへ行く」
アラディは軽く頷いて、ユーリアにも頭を下げた。
じきに彼女らはグリフォンに二人ずつ騎乗して、解放軍の野営地を目指していた。

グランディーナとランスロットがポリュボスに乗ったが、このままではグリフォンが足りないことに気づいたユーリアが自分のグリフォン、エレボスを呼び出したのだった。

待っているあいだにポリュボスは休んだらしく、その翼は来た時同様、力強く羽ばたいたし、エレボスはポリュボスよりも大柄なグリフォンだ。

「ランスロット、あなたとアラディは野営地で降り、皆に待つように伝えてくれ。ウォーレンとカリナにはラウム町長を連れてくるように」

「我々は君の帰りを待つだけか？　ペシャワールへ先に向かうわけにはいかないのか」

「ギルバルドは私との一騎打ちを望んでいる。軍隊を差し向けるわけにはいくまい」

「なぜギルバルドの要求に応えてやる必要があるのか教えてくれないか」

「ギルバルドは勝つ気などないからだ。その上で彼は死を望んでいる。だが私はその願いを容易に叶えてやる気はない」

「だがラウム町長はギルバルドのことを自分でとどめを刺したいと言ったのではないのか？　彼を連れてくるのはその本懐を遂げさせてやるためなのだろう」

「あなたが帝国ならば、シャローム地方を支配するために魔獣軍団長ギルバルド＝オブライエン、副団長ガルシアン＝ラウム、有力者カノープス＝ウォルフ、誰を残し誰を殺す？　ほかの者でもかまわない」

そう訊ねたグランディーナの声音は静かだったが、はっきりとランスロットに聞かれた。

予期してもいなかった問いに彼は黙り込み、しばらくはグリフォンの羽ばたきだけが聞こえた。

「それは意地の悪い問いだな」

「簡単な引き算だ。カノープスは一線を引いた。ギルバルドは元々シャローム地方を治める家柄だ。二人への牽制もある。副団長を殺す」

「そういう言い方をするのなら、なぜギルバルドも殺してしまわなかったんだ？　首をすげ替えた方がよほど帝国にとっては都合がいいだろう？」

「ギルバルドが降伏したことでシャローム地方は無傷で帝国のものになった。ギルバルドを殺せばカノープスも魔獣軍団も黙ってはなかったろう。結果的に魔獣軍団はほとんど残った。副団長の死と大勢の部下の命と、ギルバルドがどちらを取ったのかはわかりきったことだ」

「まるで君もそういう選択をすると言っているよう

だな」
二頭のグリフォンは降下を始めていたが、グランディーナはランスロットを振り返った。
「最後まで抗う。だが一人を助けるために大勢を犠牲にしていいとは限るまい。たとえそれが自分の命でもだ」
ランスロットが応えるより早く、グランディーナは正面に向き直り、叫ぶように言った。
「私とユーリアはすぐにエレボスで発つ。皆への説明はあなたに頼む」
「朗報を期待している！」

野営地に戻ったランスロットは、真っ先に起きてきたウォーレンに事情を手短に説明し、アラディを紹介した。
ウォーレンはカリナを起こすと、すぐにラワンピンジに発ち、後にはランスロットとアラディ、それにばらばらに起きてきた者たちが残された。
最初に起きてきたのはマチルダだ。職業柄か彼女はいつも早起きなのである。
ランスロットは彼女にごく簡単に事情を説明すると、グランディーナとウォーレンたちの帰還を待つように言ってから仮眠をとった。
彼は昨晩から一睡もしていなかったのだ。
解放軍の面々が次々と起きてくるなか、白々と夜は明けつつあった。

「兄に会うのは本当に久しぶりです。兄は変わっていないでしょうか？」
「私が知っているのは一昨日会ったカノープスだけだ。変わったかどうかは知らない」
「そうですね。おかしなことを言いました。でもあなたがまるで古くからの友だちのように思えたものですから。あなたは、本当に兄にギルバルドさまが説得できると思いますか？　ギルバルドさまは誇り高いお方、皆のためとはいえ帝国に降伏した自分をお赦しにはならないでしょう。兄にギルバルドさまのお気持ちがわかるでしょうか？」
「なぜできないと思う？　ギルバルドもカノープスも持っている誇りに違いなどあるまい」
「兄のことはわかりません」
ユーリアは不安そうな眼差しで眼下に見えるバハーワルプルの町を眺めた。その手のなかで火喰い鳥の羽根が激しく動く。

エレボスはバハーワルプルの上空で一度旋回し、降下した。夜明けとともに町は目覚めようとしていた。

「兄さん、お久しぶりね」

一昨日同様、グランディーナにたたき起こされたカノープスは、外に立つユーリアに怒りが急速に萎えるのを感じた。

「ユーリア！　何をしに来た？　ここには二度と来ないんじゃなかったのか？」

「何年ぶりかで会ったというのにずいぶんなご挨拶ね。ええ、確かに二度と来ないと言ったわ。でも事情が変わったの、兄さんにどうしても会わなければならなくなったのよ」

「またおまえが原因か？　おまえには二度とここに来るなと言ったはずだな」

「喧嘩なら受けてたつ。そんな暇があるかどうかは別にしてな」

「何だと?!」

「二人ともやめて！　そんな暇はないのよ。私はこれを兄さんに渡しに来たの。ギルバルドさまから二四年前に預かったわ、遅くなったけれど、兄さんに渡すべきだと思って」

差し出された火喰い鳥の羽根を見ても、カノープスの顔は輝かなかったし、受け取ろうともしない。

ユーリアは、いまごろになって酒のまわってきたような兄の手のなかに羽根を押しつけた。それは落ちることはなかったが、いまのカノープスのように頼りなく揺れている。

「彼女は言ったわ、兄さんはまだ戦いをやめていないと。ねぇ、だったら私と一緒に来て。このままではギルバルドさまが死んでしまう。ギルバルドさまを助けて、兄さんにしかできないの、私ではギルバルドさまを助けられないの！」

「おまえ、今度はユーリアにまで何を吹き込んだんだ？」

「馬鹿言わないで。私は自分の意志でここに来たの。それとも兄さんはギルバルドさまが死ぬのを黙って見ているつもり？」

「ギルバルドがそう簡単に死ぬようなたまかよ。冗談も休み休み言ったらどうなんだ」

「ギルバルドは今日死ぬ。それが事実だ」

「胡散臭い奴だと思っていたが、おまえは予言者だったのか？」

「事実だと言っている。あなたがペシャワールに行

こうと行くまいと私はギルバルドと決着をつける。だが彼が望んでいるのは死だ。それでシャローム地方は帝国から解放される」

「ふざけるな！」

カノープスはグランディーナにつかみかかったが簡単に避けられた。それが彼の怒りの炎に油を注いだ。

荒々しく小屋に戻ると、カノープスはほかの何にも目をくれず、壁にずっとかけてあった鎚をひっつかんだ。カリナの武器と似ているが、鉄を巻いて補強してあるあたり、数倍強力な代物だ。もちろん重さも半端なものではない。

彼は力任せに鎚を振り回し、グランディーナに襲いかかった。

「兄さん！　やめて、兄さん！」

「黙ってろ、ユーリア!!」

しかしグランディーナは腰の曲刀を抜かない。それに加えて腹立たしいのは紙一重で避けていくところだ。一度などは勢い余った鎚が小屋の壁にめり込んだ。

カノープスはとうとう飛び上がった。戦士として彼は、自分が飛べることの有利さをよく理解していた。

「いい加減にして、兄さん！」

ところがその時に限ってカノープスはユーリアの存在をすっかり忘れていたのだ。

保守的な有翼人社会の中でもいちばん保守的なバルタンの女性の常で、ユーリアは行動的ではない印象を与える物静かな娘だ。

しかし、彼女もだてに「風使い」と呼ばれるカノープスの妹ではなかった。飛行競争をやれば並のホークマンが勝てる相手ではないし、身の軽さもよく助けになっていたものだ。

いまもユーリアは、鎚を振りかざしたカノープスの一瞬の隙をついて、その両頬をひっぱたいたのである。

「もう兄さんには頼まないわ！　行きましょう、グランディーナ！　こんな人を買いかぶる必要なんてないのよ！　兄さんがそのつもりならいいわ、ギルバルドさまは私たちだけで助けてみせます。見損なったわ、兄さん!!」

彼女は素早く地上に降りると、グランディーナを引きずるようにして連れていってしまった。

解放軍のリーダーも呆気にとられていたが、カノープスの驚きはそれ以上だ。

彼は完全に怒気を抜かれた形で地上に降り、鎚を両手で抱えて座り込んだ。火喰い鳥の羽根は彼の手のなかから落ちていない。

だがそれだけだった。
カノープス＝ウォルフ、風使いと呼ばれたバルタンの戦士は、うつむいたきり動かなかった。

エレボスに乗り、再び解放軍の野営地を目指した途端、ユーリアは声をあげて泣き出した。その激しさは来た時とはまるで別人のようだ。
グランディーナは黙ってグリフォンを駆った。
その行為はユーリアを落ち着かせるのに役立ったようで、海の上を飛び始めたころ、彼女はようやく泣きやんだ。
「すみません、役に立てなかったばかりか恥ずかしいところまで見せてしまって」
「気にすることはない。私もカノープスを挑発しすぎた」
「兄はやはり変わってしまいました。誇りも友情も何もかも失ってしまったように思います。あんなに簡単に私に隙をつかせる人ではなかったのに」
「あなたの言うとおりなら、カノープスに望みは託せるまい。だが彼は必ずペシャワールに来る。それが遅れないことを願うだけだ」
「なぜそんなに兄のことを信頼できるのです？」
「来なければ彼は何もかも失う。それほど自暴自棄になってはいないだろう」
ユーリアは無言だった。
それでグランディーナは淡々と言葉を継いだ。
「ウォーレンとカリナが戻っていたら、私たちはペシャワールに向かう。ギルバルドは私と決着をつけることで全てを終わらせたがっている。それにラワンピンジのラウム町長も同行する。彼は息子の死のことでギルバルドを恨んでいて、自分の手でとどめを刺したいのだそうだ」
「サイクスさまがそんなことを言ったんですか？」
「そうだ」
「ガルシアンさまが処刑されたのはギルバルドさまのせいではありません！　ギルバルドさまはガルシアンさまととても仲が良かったのですもの、絶対に止めようとしたはずです」
「そう言って思いとどまる相手ならば言うがいい。だが現実にギルバルドは生き残りガルシアンは処刑されたし、ギルバルドも言い訳などしないだろう」
ユーリアはまた黙り込んだ。
やがてグリフォンは野営地に戻り、二人の帰還はウォーレンとカリナより早いことがすぐに知らされた。

「ロギンス、エレボスを休ませてやってくれ。ランスロット、ウォーレンとカリナが戻ったら皆に説明する。すぐに出発だ。
マチルダ、ユーリア＝ウォルフだ。昨日から休んでいない。少し休ませてやってくれ」
「グランディーナ、私は一緒に行きます」
「わかっている」
「君も少し休んだ方がいいのじゃないか」
「その前に何か報告があれば聞こう」
矢継ぎ早に出された指示にロギンスとマチルダはすぐに反応したが、相変わらずランスロットが食い下がった。
「報告すべきことはない。人びとは我々に好意的だし、昨晩も何もなかった」
「わかった。それと、あなたはペシャワールに同行するのだろうな？」
「当たり前だ。わたしが行かない時はウォーレンに同行してもらう。ペシャワールに行くのはまたグリフォンを使うのか？」
「歩いていくには遠い。ポリュボスとシューメーを働かせどおしだ。もう何頭かグリフォンが欲しいところだな」
「君は自分もそうだということを忘れている。ウォーレンたちが帰ってきても休んでくれないか」
「大丈夫だ」
ランスロットはまだ何か言おうとしたが、そこへウォーレンとカリナの帰還の知らせが届いた。ラウム町長も同行しているとのことだ。
ランスロットは報告を届けたヴィリー＝セキを少なからず恨めしそうに睨んだが、グランディーナは意にも介さないのだからどうしようもない。
彼女らがウォーレンや町長らを迎えに行くと、もう一人、見知らぬ男が一緒だった。
「元ゼノビア王国魔獣軍団の猛獣使い、ニコラス殿です。ラウム殿の部下だったそうで、コカトリスを貸していただきました」
ウォーレンが彼を紹介した。
ニコラスは頭を下げ、話を引き取った。
「わたしはニコラス＝ウェールズといいます。わたしもぜひ解放軍に参加させていただきたいのです。よろしいですかな？」
「歓迎する、ニコラス。早速で悪いが、あなたのコカトリスを一頭貸してくれ。ペシャワールに行きたいがグリフォンたちを休ませてやりたい」

「コカトリスはグリフォンと違います。その牙には注意が必要ですがお心得はありますか？」

「知っている。後のことはウォーレンに従え。配属はシャローム地方が終わってから決める」

何事かと皆が集まってきていた。その中には休んでいたはずのユーリアも見える。いくら休めと言われても恋人の一大事とあっては休んでなどいられなかったのだろう。彼女の真紅の翼は兄同様、とても目立つものだ。ユーリアを見つけた時、カリナはかなり驚き、喜んだようだった。

「帝国軍の司令官ギルバルドは私との一騎打ちを望んでいる。私はこれからランスロット、ユーリア、ラウム町長とともにペシャワールに行く。皆もペシャワールへ向かえ。それだけだ」

間もなく、グランディーナ、ランスロット、ユーリアとラウム町長はエレボスとコカトリスのアイギスに騎乗してペシャワールに向かった。

コカトリスはグリフォンと似た姿の魔獣だが、その毒は噛んだ相手を石のように麻痺させてしまう。毒蛇の毒牙のように、ニコラスが牙に注意が必要だと言ったのはそうしたわけがあった。気性の荒さもグリフォン並で、ゼテギネア大陸ではまとまって使役されることは珍しい方だ。

エレボスを操るユーリアの表情は複雑なものだった。同乗するラウム町長とは旧知の間柄なのだろうが、ギルバルドを助けたいユーリアとギルバルドを恨むラウム町長とでは互いに話の接点も見出せないらしく、簡単な挨拶をしたきりだ。

「どうしても君がギルバルドと戦わなければならないのか？」

「私が負けるとでも思っているのか。あなたはずいぶんと心配性だな」

「君の腕を疑うわけじゃない。ただ、君はギルバルドが負けたがっていると言うが、仮にもシャローム地方の支配者がそんな弱腰の態度を見せるのかと疑わしいのでね」

「シャロームが落ちようが帝国はまだ動かない。我々はゼノビアまでは労せずに行ける。東の辺境など失っても帝国には痛くも痒くもない。この地の帝国兵は始めから捨て石のようなものだ。だがゼノビアは別だ。ゼノビアは大都市というだけじゃなく、旧ゼノビア王国の首都であり、何よりグランの本拠地だ。ここが落とされれば帝国の威信に関わる。戦いはゼノビアを落としてからだ」

「我々の中にはゼノビアまでだと言う者もいる。王都を取り戻すことは我々の悲願だ。版図の復興もゼノビアとシャローム地方を取り戻せれば難しいことではない。だが我々には旗印がない。ゼノビア王国再建はできない相談だ。君はとうに気づいていただろうが」

「ゼノビア王国の再建を願うのはかまわないが、たとえ旗印があろうがなかろうがゼノビアだけで帝国に対抗できるとでも思っているのか？　帝国はゼノビアが落とされれば我々を黙認できなくなる。帝国の版図は旧ゼノビア王国の数倍だ。赤子の手をひねるより速くつぶされるぞ」

「わかっているさ。だがそれならば、解放軍ではなくゼノビア王国の旗を掲げたいのだそうだ。たとえ国は滅んでも我々はゼノビア人であり、ゼノビアの旗の下に戦いたいのだそうだ」

「国はなくても人は残る。人が残れば希望がある。解放軍の旗など必要だとも思えないが愛国心に囚われた連中とは厄介なものだな」

話しているうちにペシャワールが見えてきていた。

規模はバハーワルプルと同じくらいだが、ずっとシャローム地方の中心都市であるだけにその守りは堅く、どこか物々しい構えだ。

グランディーナはペシャワールの郊外に魔獣を着陸させず、かなり強引にいちばん大きな屋敷の中庭に降ろした。そこがギルバルドの屋敷と当たりをつけてのことだったが、果たしてそのとおりであった。

初老にさしかかった男が屋敷から出てきた。豊かな顎髭をたくわえて、革鎧を身につけ、腰には鞭を提げている。堂々とした体格にいかめしい顔つき、ギルバルド＝オブライエンその人だ。

「私が解放軍のリーダー、グランディーナだ。アラディから伝言を聞いて来た」

「その騎士はそちらの立会人か？」

「そんなところだ」

「せっかく来てもらったが場所はここではない。ついて来るがいい。わたしの立会人もそこにいる」

「ギルバルドさま！」

「ギルバルド＝オブライエン！」

ユーリアとラウム町長が同時に叫んだ。町長は怯んだが、ユーリアはそのままギルバルドに駆け寄った。

「会いたかった！　話は彼女から聞きました、民のことを思う気持ちはあなたも解放軍も同じはず、なぜあなたたちが戦わなければならないのですか？　どうか剣を収めてください、こんな戦いはやめにして」

しかしユーリアはギルバルドに触れることはできなかった。元ゼノビア王国魔獣軍団長は、昔の恋人をはっきりと拒絶していたのだ。

「あなたは変わらない、ユーリア。わたしの記憶にあるままに若く美しい。だがわたしは老いた。わたしはもうあなたの知っていたギルバルドではないのだ」

「いいえ、歳は取ってもあなたは私のよく知っているギルバルドさまです。なぜ剣を収めてはいただけないのですか？　なぜ和解することがおできにならないのですか？　戦う以外の道を探してください、私は戦いは嫌いです、戦うことでしか解決できないものがあることなど信じたくありません」

一瞬、二人のあいだに温かい思いやりが交わされた。ユーリアはともかく、ギルバルドもいまだ彼女を憎からず思っているのだ。だからこそ彼女を遠ざけたのでもあろう。

だが、気を取り直した町長が冷たい口調で遮った。

「そんなことはさせぬぞ、ギルバルド＝オブライエン！　わたしを見ろ！　わたしを忘れたとは言わせん、わたしはおまえが見殺しにした魔獣軍団副団長ガルシアン＝ラウムの父親だ。今日はおまえにとどめを刺してやるために来た。命乞いなど聞く耳持たぬわ！」

「わたしは逃げも隠れもしません。命乞いなどする気もない。だがここで決着をつけないのだから、場所を変えていただきましょう」

「卑怯者め！　そんなことを言って我々を罠にはめるのであろう。ここで立ち会わぬか！　立会人など口実であろう！」

「町長、私があなたの同行を許したのは罵声を吐かせるためじゃない。これ以上くだらぬ茶々を入れるのなら、あなたにはラワンピンジに帰ってもらうぞ」

町長はびっくりしたが、ギルバルドは苦笑いを浮かべた。

「わたしはかまわぬ。何をどう言われたところで言い訳などする気もないしガルシアンを見殺しにしたのも事実だ。だがわたしの部下たちには血の気の多い者も少なくない。立ち会いをさせなければ、わたしの敗北を受け入れず、また要らぬ争いを繰り返すことになろう。わたしが案じるのはそれだけだ。

同意していただけましょうな？」

最後の言葉はラウム町長に向けられたものだ。彼は不承不承ながらも頷いたが、自分を無理に奮い立たせているようにも見えた。

「なに、場所を変えると言ってもそう歩くわけでは

ない。乗ってきた魔獣もそのままにしておくがいい。終わるまで、そう時間はかかるまい」
「良かろう」
先頭に立ったギルバルドをグランディーナが追い、ユーリアもその後を追いかけた。
しょうがないのでランスロットは、ラウム町長を気遣いながら最後尾からついていった。
屋敷を出ると大勢の人びとが入り口を囲んでいた。いきなりグリフォンとコカトリスが二頭も乗り込んだのだ。先頭にギルバルドが立つのを見て、安堵のため息さえ聞かれた。だがその後にグランディーナらが続いて出ると、敵意むき出しの視線が感じられた。
「スタインはいるか？」
「はい、ここに」
「反乱軍のリーダーが来た。おまえに立ち会いと後のことを頼みたい」
「わかりました」
出てきた男もやはり魔獣使いのようだ。彼はユーリアには簡単な挨拶しかしなかったが、ラウム町長のことはずいぶん凝視していた。
「なぜあなたがこんなところにいるんです？」
「それはこちらの台詞だ。ガルシアンが殺されて、おまえがギルバルドの副官になったというわけか」
「残念ですが、そうではありません。あなたはギルバルドさまを誤解しています」
「ふん」
ギルバルドが歩き出すと群衆は道を開けた。なかには明らかに猛獣使いや魔獣使いとわかる者も混じっている。軍をもって攻め込めば、激しい戦いは避けられなかっただろう。
グランディーナは一度立ち止まって、ゆっくりと群衆を眺め回した。威嚇するようでなく、臆したところも見せず、明らかな敵地にあって、その態度は人びとの罵声や手の中の卵や石を投げさせないだけの落ち着きを見せている。
大した混乱も起きずに一行は移動し、群衆もそれに合わせてついてきた。
ギルバルドが案内したのは、ペシャワールの中央広場であった。
「ここでなら誰に迷惑をかけることもあるまいし全ては白日のもとに明らかだ。さあ始めようか」
ギルバルドは鞭を持ち、幾度か鳴らした。魔獣使いの操る鞭は武器としても強力なものだ。熟練者が扱えば鞭の射程の長さは剣などに比べれば驚異でもある。

グランディーナも曲刀を抜き放った。
「いざ！」
ギルバルドの鞭がしなる。
グランディーナは強引に懐に入ろうとしたが、鞭は彼女の得物にからみついた。
ギルバルドは鞭を引いたが、グランディーナも容易には取らせない。
引っ張り合ったまま、二人はしばしにらみ合った。
「迷いのない良い目をしているな。だがわたしは、正直おまえがこの申し出を受けるとは思っていなかった。断るだろうとさえ思ってアラディを送り出したのだ。なぜ受けた？　ほかの五都市を落とした勢いで軍を率いてくるだろうと思っていたが」
「どの町も落とすまでもなく門戸を開いた。それにあなたという人間に興味を持ったからだ」
ギルバルドが鞭を引き、二人は分かれた。
「これは異なことを聞くものだ。わたしはグラン王の死とともにゼテギネア帝国に降った身、裏切り者の何に興味を抱くのだ？」
グランディーナがすぐに打ち込んだ。その動きは以前カリナと打ち合った時よりも、さらに速いようにランスロットには思われる。
「私はゼノビア人ではない。帝国に降った身であろうと帝国と戦ってきたことに違いはあるまい！」
ギルバルドはそれらを鞭の柄で受けようとしたが、とうてい受けきれるものではなかった。
「戦っただと？　わたしが帝国の犬であったことは皆が知ることだ。あらぬ同情は無用、我が首を取って先へ進むがいい！」
その言葉を受けるようにグランディーナはギルバルドの鞭を切り捨てた。
ギルバルドは諦めとは取れぬ表情で両手を広げ、片膝をついた。
降伏の意をくんでグランディーナも曲刀を降ろした。
「それでいい、グランディーナとやら。後はサイクス殿にとどめを刺させるがいい」
「待ってください！」
町長より先にユーリアが飛び出した。彼女は翼を広げ、ギルバルドを万人から庇うように立ちふさがった。
ラウム町長もすぐに進み出ていた。彼は短剣さえ持参しており、グランディーナと並ぶと立ち止まった。
「どいてくれんか、ユーリア。そなたがギルバルドを慕う気持ちもわからんではないが、ガルシアンが処刑されてからこの方、わたしはこの時だけを夢見てき

たのだ。この男を討たねばわたしの気は晴れぬ。討たせてくれ」
「嫌です！　ギルバルドさまを討たれてもガルシアンさまは生き返りません。それでもギルバルドさまを討つと仰るのなら私を先に殺してください！」
「待ってくれ!!」
そこへ飛び込んできたのはカノープスだった。彼は息を切らしていたが、ラウム町長に土下座した。
「ギルバルドを殺さないでくれ！　ガルシアンが処刑されたのはこいつのせいじゃない。その逆だ。ギルバルドは最後までガルシアンを助けようとしたんだ、俺たちを助けたように！　あんたにだってわかっているはずだ、魔獣軍団の奴らがこれだけ生き残っているのはギルバルドのおかげじゃないか。シャローム地方がそっくり無事なのはなぜだ？　みんなだってわかっているはずだ！」
「だがガルシアンは殺された。おまえたちは生き延びたがガルシアンは殺されたのだ！
そうか、わかったぞ。調子のいいことを言って、最初からわたしをはめる気だったのだな。解放軍など最初からギルバルドと戦う気などなかったのだろう？　しょせんおまえたちもゼノビアの人間だ、わたしの気持ちなどわかるはずもなかったのだ」
「解放軍は関係ない！　町長、ギルバルドを殺せばガルシアンが生き返るのか？　ガルシアンは生き返らない、ギルバルドを殺して何になるっていうんだ?!」
「長年の恨みを晴らすことができる。それだけが願いだったのだ、それだけのために生き長らえてきた。おまえらになど邪魔をされてたまるか！」
「やめてくれ！」
「待て」
カノープスの手を引き留め、ユーリアを押しのけるようにしてギルバルドが現れた。彼はラウム町長の手を取り、その短剣を自分の胸元に合わせた。
「心臓はここだ。力を入れて刺されよ。骨に引っかかった時はもう一度刺しなおされるが良かろう」
「何のつもりだ、ギルバルド？」
「あなたが刺しやすいようにしたつもりだが？」
「馬鹿を言うな！　これから殺されようという人間が刺しやすいようにするだと？　そんな話、信じられるものか！」
町長が腕を振るうとギルバルドは簡単に手を放した。
「首を狙え。あなたの力では心臓など刺せない。首ならば力のない者でも容易に刺せる」

グランディーナが淡々とした口調で言った。
カノープスやユーリアばかりか町長までも驚いたように振り返ったが、ギルバルドも同意するように頷く。
ラウム町長は両手で短剣を握りなおした。だがその手は細かく震えている。
「やめてください、サイクスさま！」
ユーリアが悲鳴のように叫んだ。
しかし町長は、ギルバルドの喉元めがけて短剣を突きだした。
「動くな！」
グランディーナの一声がギルバルド、カノープスの動きを止める。
短剣の先端はかろうじてギルバルドの喉に届いていたが、刺すには至っていなかった。それでギルバルドは一歩進んで、自ら刺されようとしたのだ。
カノープスはそんなギルバルドとラウム町長のあいだに割って入ろうとしていた。
だが町長の手はそれ以上前に動かなかった。
どうなることかと見守るうちに手ばかりか身体まで震えだして、とうとう彼は短剣を落としてしまった。
「わかっている、わかっているのだ。おまえを殺したところでガルシアンは生き返ってこない。わたしの願ってきたことなど何の意味もないのだ」
サイクス＝ラウムは力なく跪いた。涙が一つ、二つと落ち、やがて滂沱と流れ出した。
グランディーナがいつになく穏やかな表情で彼に近づき、黙って左手で抱きしめる。
「ガルシアン、ガルシアン、おまえの仇を討つことだけがわたしの願いだった。だがわたしにはできないのだ、ギルバルドを殺せないのだ。恨みを晴らせぬことが苦しい、だが奴を恨み続けてきたことの方がもっと苦しいのだ、どうすればいい？　わたしはおまえのために何をすれば良かったのだ？　教えてくれ、ガルシアン」
「あなたは間違ってなどいない。あなたはとうにギルバルドを許している。誰もが剣を持てるわけじゃない、人を殺せるわけじゃない。あなたの選択は間違っていないのだ」
「わたしにギルバルドを許せと言うのか？」
「そうしていることを認めればいい。甘美な復讐など幻影だ。そんなものは存在しない。復讐を遂げたところで、あなたの心は決して安まりはすまい」
町長は顔をあげ、グランディーナに微笑みかけた。その涙は止まっており、彼を包んでいた悲痛な気配も

いまは失せている。
「わたしは疲れたよ。町長職などとっくに誰かに譲っているべきだったのだろうな？」
「あなたが自ら気づいたのだ、遅すぎることはあるまい。後でニコラスにラワンピンジまで送らせよう」
老人はゆっくりと頷いた。そう、彼は老人だった。矍鑠とした印象もどこにもない。
グランディーナはサイクスから離れ、ギルバルドの方を向いて立ち上がった。
「馬鹿な！　ラウム殿はこのわたしを許すと仰るのか？　わたしはわたしの罪をよく承知しています。わたしのことを恨む者も帝国の犬と誹る者も少なくない。その者たちのためにもわたしを刺されよ。わたしの罪は死によってしか償えない」
「ギルバルド！　馬鹿なことを言うな、どうしておまえが死ななきゃならない理由がある？　おまえの罪とは何だ？　戦わずに帝国に降伏したことか？　グラン王の仇を討たなかったことか？　そのためにシャローム地方は戦火に巻き込まれなかったんだろう、おまえは玉砕覚悟の戦いを回避して俺たちを守ったんだ、どうしてそんなことが罪になる？　誰がおまえを責められるっていうんだ？　俺が責めさせやしない、おまえに謝らなければならないのは俺の方だ！」
ずっと厳しい表情をしていたギルバルドのおもてに初めて笑みが浮かんだ。
だが、その笑顔を見たカノープスの手はギルバルドの腕を握ろうとして思いとどまった。
ユーリアもまた、ギルバルドに声をかけることができないでいる。
ギルバルドだけが笑みを浮かべたまま立ち上がり、グランディーナに近づいた。
「わたしを討つために来たのだろう。わたしは逃げも隠れもしない。もう思い残すこともない。わたしを討って過去の遺恨を絶たれよ。シャローム地方はそれでまとまろう」
グランディーナはまだ曲刀を抜いたままだった。
彼女がそれを振りかざすのをカノープスもユーリアも止めることができない。彼女はラウム町長のようにためらったりはしないだろう。
ギルバルドはただ両手を広げて立っている。
曲刀が一閃し、ギルバルドの顎髭が顎すれすれまで切り落とされた。
グランディーナが曲刀を吹くと、白い髭が落ちる。彼には傷ひとつついていなかった。

「罪があるのならば生きて償え。だがそれも全てはゼテギネア帝国に端を発すること、ともに戦ってはもらえないか、ギルバルド」

「馬鹿な！　なぜわたしを許す？　なぜここでわたしを裁かないのだ？」

「私にあなたを裁く権利はないようにあなたにも裁きを強制する権利はない。私があなたを討っても、そのために苦しむ者が生まれるだけだ。それに償う気があるのなら、生きてこそ罪は償えるものではないのか？　死など、あなたの自己満足に過ぎない。そんなことのために剣を振るう気はない」

グランディーナは曲刀を収め、ギルバルドらに背を向けた。

「いまはその気がなくても気が向いたら解放軍に来るがいい。私はいつでも歓迎する。カノープス、ユーリア、あなた方の席もあることを忘れるな」

グランディーナは真っ直ぐにランスロットの方に近づいていった。

そこへスタインが近づき、手を差し出した。その厳つい顔は満面の笑みに覆われている。

グランディーナは黙って、その手を握り返した。

彼女が笑みを浮かべるのをランスロットは初めて見た。スタインにつられたのか、ごく自然にこぼれたものと思われる。

「待ちなよ、グランディーナ」

グランディーナとランスロットも含めて、人びとの視線が一斉にカノープス、ギルバルド、ユーリアらに集まった。

「いつでもなんて気の長いことは言わねぇよ。いますぐだ、俺もギルバルドもユーリアも一緒に行ってやる。帝国と戦ってやるよ」

グランディーナは笑って親指を立ててみせた。その髪が突然の風を受けて大きくあおられた。

人びとが口々に良い兆候であることをつぶやく。この季節の東からの風は珍しいのだ。

「解放軍を代表して君たちを歓迎する。わたしはランスロット＝ハミルトンだ」

「ああ、忘れてねぇよ」

ランスロットとカノープスは堅い握手を交わした。

ギルバルドはまだ夢から覚めていないような顔だ。だがそこに解放軍の一行がようやく到着するに及んで、自分のなすべきことを悟ったようでもあった。

シャローム地方から西へ、街道は二つの方向に分かれる。南東に向かえばジャンセニア湖へ、南西に向かい、北西に折れていく道はイグアスの森、通称ポグロムの森へ続き、その先はゼノビアだ。

解放軍が勢揃いし、ラウム町長もラワンピンジへ送られた後で、請願者が現れたのは夜のことだった。

新しく解放軍に加わった、ギルバルド、カノープス、ユーリアと、ギルバルドの二頭のワイバーン、プルートーンとクロヌスも皆に紹介された後だ。

「娘がジャンセニア湖のアンタルヤに使いに行ったまま帰りません。どうか探して連れて帰ってはいただけないでしょうか」

その言葉に反対できる者はいなかった。

たとえ先にゼノビアを解放したい気持ちが強くても、仮にも解放軍と名乗る以上、民衆の頼みを聞かないわけにはいかない。

かくして解放軍はシャローム地方の南東、ジャンセニア湖を目指す。

そこで待ち受ける人狼伝説も知らずに。